# ARIA～水の惑星の奇跡

toto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＡＲＩＡ～水の惑星の奇跡

【Ｎコード】

Ｎ２２３２Ｘ

【作者名】

ｔｏｔｏ

【あらすじ】

この物語は、過去の出来事によって自分が傷付いてもそれが自分が受ける罰と思っている主人公、春風・春夜（はるかぜ・しゅんや）が、灯里達（ウンディーネ）水先案内人とアクアの人達の出会いによって変わっていく物語です。

## プロローグ（前書き）

初めまして？ＡＲＩＡの二次創作です？ＡＲＩＡはとっても良い作品です、僕もアニメを全期見て漫画も買ってしまいました？ガッカリさせないように書いていきますので、よろしくお願いします？

# プロローグ

「本当に1人で大丈夫かい」叔母さんが僕に聞いてきた。
「はい、大丈夫です。」
僕は、そう答えた前日に両親の葬式があったばっかりで親せきのみんなはまだ元気がなかったそれに誰が僕を引き取るかで話し合いがあった。
「本当に1人で大丈夫なのかい？無理しなくてもいいんだよ…。」
「大丈夫だよ、叔母さん・・・それにお母さんとお父さんが残してくれた物を大切にしたいんです。」
僕の両親は遺書を残してくれていたその遺書には、「「春夜お前がこれを読んでいるという事は父さん達は既にいないということになる、もし父さん達がいなくなったらネオ・ヴェネチアに行きなさい、そこに昔父さん達が住んでいた家がある、もし困った事があったらＡＲＩＡカンパニーのアリシアさんと秋乃さんを頼りなさい、お前がよくお世話になった2人だ必ず助けてくれるはずだ、それと人の心配ばかりではなく自分の事も心配しなさい、あの事故はお前のせいじゃない自分だけが傷付くのが当然なんて間違っているお前はとても優しい…いや…優しすぎる、お前は人の心の傷みが分かる人間だ、だからこそお前には幸せになってほしい、お前自身が変わる事を父さん達はずっと願っているお前は1人じゃない・・・ずっと父さん達は見守っているぞ」」と遺書には書かれていた。
「お父さん・・・お母さん…ごめん…僕は駄目だよ、ちゃんと罰を受けないといけないんだ…ラロは僕が殺したのも当然なんだ…。」
僕は叔母に聞こえないよに言った。
「間もなく当機は惑星アクアに向けて発進いたしますまだお乗りでない方は急いでお乗り下さい。」
「あっ、もう行かなきゃ！ありがとう叔母さん見送ってくれて。」
「春夜・・・気を付け行ってくるんだよ。」

叔母さんは僕にそう言ってくれた不思議と嬉しかった、僕は叔母さんに手をふり船に乗りこんだ。

## プロローグ（後書き）

いや～テスト前なのに書いててていいのかな？まっいいか♪それでは次の回にまた？

## Ｎａｖｉｇａｔｉｏｎ０１　その懐かしい場所（前書き）

なんとか書けましたぜひ楽しんで下さい、あなたに祝福を…？

## Ｎａｖｉｇａｔｉｏｎ０１　その懐かしい場所

「嘘だよ…こんなの…何で…どうして…どうして！」凄く悲しい…悲しくて切ないそして苦しい…僕は、僕は！

「間もなく当機は目的地ネオ・ヴェネチアに着きます、忘れ物がないように気を付けて降りて下さい。」

「ん？…夢か…また・・・あの時の夢」

僕はアナウンスの声で目を覚ました、今日から僕はこの水の惑星アクアの水の都ネオ・ヴェネチアに暮らすことになる、ネオ・ヴェネチアに来たのは、引っ越す事になったからだ。

「何年振りだろ…」

僕は小さい頃ネオ・ヴェネチアに遊びに来ていた事があり、その時によく知り合いの家に遊びに行っていた事があった。

「元気かな秋乃お婆ちゃん♪」

秋乃お婆ちゃんは、僕の本当のお婆ちゃんじゃない、秋乃お婆ちゃんは僕の両親と仲が良くネオ・ヴェネチアに観光に来るたびお世話になってたいた、僕も本当のお婆ちゃんのように慕っていた、そうこう考えている内に着いたようだ。

「え～と三番ゲートは・・・あった！」

久し振りのネオ・ヴェネチア♪とっても楽しみだ♪

「うわぁ♪綺麗だな、前、来たときも綺麗だったけど、もっと綺麗に見える♪」

僕は目の前の光景に心を打たれた、水がきらきらと輝いて凄く綺麗だ。

「と、確か引っ越し先の家は・・・」

僕はメモを取り出して今から向かう自分の家を調べた、僕の両親は前日に他界した、親せきの引き取りもあったが僕はそれを断ったそれは両親が昔ネオヴェネチア住んでいた事がありその時住んでいた家を、僕自信が貰い受け誰の力も借りず、ひとりで生きて行こうと思ったからだ。

「ぷいぷい♪」

ん?ぷいぷい?どっかで聞いた声だな…。

「ぷいにゅ♪」

僕は自分の足下を見てみた、するとそこには見覚えのある火星猫(アクア)がいた。

「ぷいにゅ♪」

「ア、アリア社長!?」

そう僕が言うとアリア社長は僕に飛び込んできた。

「ぷい、ぷいにゅ♪」

「うわ～♪懐かしいな何年振りだっけ？」

アリア社長にそう尋ねるとアリア社長は手で数字を作ろうとしたが、どうやら難しいらしい。

「アリア社長～？」

え？この声も聞き覚えが…。

「はひ～急に走るからびっくりしちゃいましたよ・・・はひ？」

アリア社長を呼んだ彼女は、ピンク色の髪をして髪型をツインテールにしていたそして僕が物凄く見覚えがある顔だった。

「み、水無さん！？」

「はひ～！春夜君！？」

そう、僕の友達で学校も同じであった水無灯里さんであったその後は連絡も途絶えて会えずにいたけどまさか、ここで会えるとは。

「え！？何でネオヴェネチアに！？しかもその制服水先案内人（ウンディーネ）の！？」

「久し振り春夜君！」

水無さんは両手で僕の手を掴みぶんぶんと握手をした。

「ふえ！？」

僕は思わず声が裏返ってしまった、実は水無さんの事は好きでもあったりする、だから手を握られたりすると嬉しい半面恥ずかしい。

「うわ～本当に久し振り春夜君♪でも、どうして此処に？」

「あっ・・・えと、そ、その前にまず手を離してもらえるかな？」

僕がそう言うと水無さんは、はひ、と言って離してくれた。

「え～と此処に来たのは、今日からここに暮らす事になったからだよ♪」

「本当に！？じゃあこれからは毎日会えるね♪」

水無さんは笑顔でそう答えた、この笑顔が僕に元気をくれてたんだよな…不思議と落ち着く。

「そうだ！ねえ春夜君私の事務所に来てみない？」

水無さんが突然そう言ったので僕は少し戸惑った。

「事務所か…そういえばあか・・・じゃなくて水無さんのその制服ＡＲＩＡカンパニーの制服だよね？ってことは・・・」

「うん♪そうだよ私ＡＲＩＡカンパニーに所属してるんだ♪」

なるほどね、となるとアリシアさんと会うのも久し振りになるのか。

「うん、お言葉に甘えるよ♪」

断るのもなんだから、ここは甘えさせてもらう事にした。

「じゃあ・・・お客様お手をどうぞ。」

うわ、なんか雰囲気かわったな…とりあえず言われた通りに手を差し出し水無さんは手をゆっくりと引きゴンドラに乗せてくれた。

「ゴンドラ…懐かしいな、やっぱり凄くいいかも…心がぽかしてとっても気持ちいい…。」

「でしょ♪って春夜君ゴンドラ乗ったことあるの！？」

「あっ、うん♪最初乗った時もこんな気持ちなったよ…。」

「そうなんだ、私もそんな気持ちになったよ♪だから今ゴンドラが漕げることがとても楽しいの♪」

水無さん・・・嬉しそうだな…変わってないな…。

「それじゃあ出発しま～す♪」

「うん、お願いしますよ水先案内人（ウンディーネ）さん♪」

僕がそう言うと水無さんはゴンドラを漕ぎはじめた。

「あれ？でもお客さん乗せて良かったんだっけ？」

水先案内人（ウンディーネ）は確か両手袋（ペア）が見習いで片手袋（シングル）が半人前で手袋なし（プリマ）が一人前だったはず両手袋（ペア）はお客さんを乗せられなくて片手（シングル）

袋から手袋なし（プリマ）の人が一緒なら乗せられたはず、だけど今は水無さん1人いいのかな？

「うん♪多分大丈夫だよ、友達って言えばアリシアさん許してくれるよ♪」

多分なんだ…そっか水無さんは僕とアリシアさんが知り合いってことは知らないんだったけ、まあ僕も大丈夫だと思うけど。

「私も久し振りにたくさんお話し、したいし♪」

水無さんは笑顔でそう言った。

「それにネオ・ヴェネチア　がどんな場所なのか教えたいし♪」

ネオ・ヴェネチアか…この水の惑星アクアは火星を惑星地球化改造（テラ・ウォーミング）して今の惑星になった、地球（マンホーム）と違って自給自足の生活でとっても不便だ・・・だけど。

「だけど…不思議と落ちつくんだよね…。」

「え！？」

「声に出ちゃってたよ♪」

やば！物凄く恥ずかしい！ああ～なんてこった！

「春夜君相変わらず恥ずかしがりなんだね♪耳が赤いよ♪」

僕はなぜか恥ずかしくなると、顔より耳の方が先に赤くなってしま

う、そのせいですぐに照れてることがバレてしまう。

「水無さん、からかわないでよ…／／／。」

「えへへ♪ごめん♪」

水無さんは笑っていた、好きな人に笑われるとは情けない…。

「水無さん！」

「灯里でいいよ♪」

水無さんは笑顔でそう言った。

「無理！」

「え～！？何で？昔は灯里ちゃんって呼んでたのに～。」

確かに昔は呼んでいたけど今の僕は・・・。

「じゃあ呼んでくれるまでＡＲＩＡカンパニーには連れて行きません～。」

なんだって！？くっ！なんと手強い相手だ、この人を好きになった自分が恥ずかしい！

「うぐぐ～あ、灯里・・・さん／／／。」

「さんなの～？ちゃん付けは？」

「無理！！」

「え～！？」

下の名前呼ぶだけでも恥ずかしいのに！ちゃん付けなんてできない！

「う～ん、まあいいよ♪春夜君女の子と話すの苦手だもんね～？」

水無さんゴンドラを漕ぎながら言った。

「もう！その事はいいから！早く連れて行って下さい水先案内人（ウンディーネ）さん！」

僕は、これ以上恥ずかしめられると倒れてしまいそうだったので、水無さんに急ぐように言った。

「はひ、分かりましたお客様♪その前にお腹は好きませんか？」

「あ、そういえばまだ何も食べてないんだった。」

ぐ～と僕のお腹が鳴った

流石になにか食べないとな…。

「じゃあ、ジャガバター食べません？」

じゃがバターかよく観光にきた時食べてたな…。

「うん、食べる♪」

「ぷいにゅ～♪」

僕がそう言うとアリア社長も食べた～いと言うように答えた。

「はい、分かりました♪」
水無さんはゴンドラを端に近づけて止めた。
「おじさ～んじゃかバター３つ下さい♪」
「はいよ、ん？嬢ちゃんそっちの兄ちゃんは彼氏かい？」
「え！？ち、違いますよ！」
「そうですよ♪おじさん春夜君は友達ですよ♪」
否定されたー！なんだろ凄く心が寂しい…負けるな僕！！
「彼氏じゃないですよ♪」
ぐはっ！くっ！いいパンチ持ってんじゃねーか！
「むしろ親友です！」
水無さんはえっへんと胸をはって言った、今度は物凄く心が暖かくなった。
「み、水無さん、なんかありがとう…。」
「あ～また水無さんって水無さん言うの禁止～♪」
「え～！？」
そんなこんなで、僕達はじゃがバターを食べて、ＡＲＩＡカンパニ

ーへ向かった

## Ｎａｖｉｇａｔｉｏｎ０１　その懐かしい場所（後書き）

うちにも猫がいるんですが青い瞳じゃないんですよね～残念です？

## Ｎａｖｉｇａｔｉｏｎ０２その神秘的な花庭（前書き）

だいぶ遅れてすみません？それではどうぞ？

## Ｎａｖｉｇａｔｉｏｎ０２その神秘的な花庭

「着いたよ♪春夜君♪」

水無さんはそう言ってゴンドラをゆっくりと泊めた。

「ＡＲＩＡカンパニー…久し振りだな…。」

あの時と全然変わらない…でも、なんだか凄く嬉しい。

「アリシアさ～ん、今帰りました。」

「お帰りなさい灯里ちゃん♪あら？」

アリシアさん相変わらず綺麗だな、って変態か僕は！？

「お久し振りです…アリシアさん。」

僕は軽くお辞儀をした、アリシアさんも凄くお世話になった人だ僕にとっては姉のような存在だ。

「あらあら、春君！？久し振り大きくなったわね～♪」

アリシアさんと秋乃お婆ちゃんは僕の事を春君と呼んでいた、僕は正直恥ずかしい。

「アリシアさん・・・その呼び方はちょっと／／／。」

「あらあら♪恥ずかしがりやさんなのも変わらないわね♪」

アリシアさんはニコニコしながら言った、この人には敵わないな…。

「とりあえず中にどうぞ♪」

「あ、お邪魔します。」

僕はドアを開けて中に入った。

「うわ～懐かしい♪」

あの時の風景と全く一緒・・・。

「灯里ちゃん、お茶を入れて来て貰えるかしら?」

「はい、いいですよ♪」

水無さんは楽しそうにしながらキッチンに行った。

「どうぞ座って♪」

「あ、はい。」

僕は椅子にゆっくりと座った。

「話しは聞いているわ…大変だったわね・・・」

アリシアさんは少し悲しい顔をしてそう言ってくれた、多分叔母さんが話したんだろうな…。

「はい、だけど大丈夫です、悲しかったけどいつまでも泣いていられないんで。」

僕はアリシアさんに心配させないためにそう言った。

「そう・・・でもちゃんと頼って頂戴、私も力になりたいから♪」

アリシアは笑顔で言ってくれた、僕は嬉しいと同時に罪悪感でいっぱいになった。

「・・・はい」

僕はアリシアさんに笑顔で答えた、ごめんなさいアリシアさん…僕は、誰にも頼らないって決めたんです。

「はい、どうぞ♪」

そんな事を思っていたら水無さんがお茶を持ってきてくれた。

「ありがとう水無さん。」

「え～また水無さん？」

うっ！しまった、どうも水無さんを下の名前で呼ぶことが出来ないな。

「春夜君には、あげませ～ん。」

「え！？ご、ごめん！灯里さん！」

「よろしい♪」

とほほ～これから大変になるかもしれないな。

「あらあら♪大変ね春夜君♪」

アリシアさん笑顔でそう答えた、絶対楽しんでるなアリシアさん。

「そういえば、この後はどうするの？」

水無さんが僕に聞いてきた、確かに家はあるけど、仕事を見つけなければならない、どうしよかっな？

「ん～考えてなかったな…とりあえずまず家に向かわないと行けないのでそれから考えるよ。」

アリシアさんの力を頼る事は出来ないからな…。

「よいしょっと、ありがとう灯里さん、お茶美味しかったよ♪」

僕はそう言って椅子から立ち上がり扉に向かった。

「あ、ちょっと待って春君。」

するとアリシアさんに呼び止められた。

「っ！アリシアさんその呼び方は止めて下さいってば！」

「あらあら～ごめんなさい♪つい。」

「まあ、いいですけど・・・。」

呼ばれるなら水無さんにそう呼ばれたいな～。

「あらあら♪灯里ちゃんは手強いわよ♪頑張ってね。」

心を読まれた！？アリシアさん恐るべし！

「また、明日ここにいらっしゃい♪」

アリシアさんは僕にそう言ってくれた。

「・・・はい。」

僕はそう言って扉を開けて外に出た。

それから数分後。

「で、どうして灯里さんとアリア社長がいるの？？」

「えーと・・・それは。」

☆☆☆

「まさか春夜君とアリシアさんそれにアリア社長が知り合いだったとは、知りませんでした。」

「うふふ♪久し振りに話せて楽しかったわ♪・・・灯里ちゃん春君について行って来てくれない？」

「ほへ？どうしてですか？」

「まだ来たばかりで、迷ったりしてしまうかもしれないから、お願い出来ないかしら？」

「はひ！良いですよ♪任せて下さい！」

☆☆☆

「というわけなんだ。」

アリシアさん・・・あざ～す！

「なるほどね、まあＡＲＩＡカンパニーからそう遠くないみたいだし一緒に行こっか♪」

「はひ♪」

僕と水無さんとそれと便座カバー・・・じゃなくてアリア社長は僕の家に向かった。

☆☆☆

「着いた…。」

僕達は家に着いた、母さんと父さんが昔住んでた家に。

「うわ～♪」

水無さんは凄いという顔で僕の家を見ていた。

「・・・よし！」

僕は覚悟を決めて家の扉を開けた。

「あ…。」

家に入るとそこには、机や椅子それにキッチンがあった。

「中は普通なんだ…ん？奥にもう１つ扉？」

僕は奥に進みもう１つの扉を開けた。

「・・・これって…。」

「どうしたの？春夜君？」

水無さんも気にして続けてきた、そこにはとても鮮やかなそして凄く心が和む光景があった。

「わ～！♪綺麗♪」

そこには一面が全部花畑だった。

「凄い…。」

そっか…母さん花好きだったもんな…いつも言ってくれてたっけ…花は心を穏やかにしてくれる人を幸せにしてくれるだから私は花が好きって…。

「・・・っ！母さん…。」

ここでも育ててたんだ…母さん…。

「春夜…君？泣いてるの？」

僕は涙が止まらなかった…花が泣いてもいいんだよとそんな事を言ってる気がした…花が喋るはずないのに、なんだかそう言ってる気が慰めてる気がした。

「ひっく…ごめん…泣かないって…決めたのに…ひっく・・・ああ！うわあ―ん！」

あ～あ～情けないな僕…でも今だけ泣いてもいいよね…。

「春夜君…、いいんだよ・・・今は泣いても・・・。」

そう言って水無さんは優しく手を握ってくれた。

数分後。

「えっと・・・ごめんね恥ずかしいところ見せちゃたね。」

僕は涙だが止まり落ち着いていた。

「ううん…でもまさか春夜君のお父さんとお母さんが亡くなっていたなんて…。」

水無さんは顔をうつむかせて言った、母さん達が亡くなった事話したの失敗だったかな？

「うん、でも母さん達はそれを乗り越えらせるために、この家を残

してくれた、だから僕は乗り越えて行こうと思う。」
僕が笑顔でそう言うと水無さんは顔をあげた。
「春夜君…。」
「それに、舟(ゴンドラ)も残してくれてたみたい♪」
母さん達は、どうやらこの家で店をやっていたらしく、道具が色々出てきた。

「と言っても僕は店をもつ事は出来ないしな…とりあえず食事とか作れるから大丈夫かな?…ただ問題は生活費か…。」
生活費どうしようかな…ん〜アリシアさんを頼るわけにはいかないし、どうしよっかな?
「あれ?水無さん?」
あたりを見回すと水無さんアリア社長が居なくなっていた。
「何処行ったんだろ?」
ふう〜この家たたでさえ広いのに全く!
「春夜君!こっち凄いよ!」
すると二階から水無さんの声が聞こえた。
「水無さん?あんまりうろちょろしたら駄目だよ。」

僕は二階に上がって水無さんの声がした方に向かった。

「うわ～♪」

水無さんは目を輝かせて窓の外を見ていた。

「何が凄いの・・・ってこれは！」

窓の外を見るとネオ・ヴェネチアの海が広がっていた。

「確かに凄い…母さん達も良い場所に建てたな…。」

「うん♪凄く綺麗海がキラキラ光って、まるでお星さまがいっぱい広がってるみたい♪」

う！恥ずかしい言葉を堂々と・・・本心なのだろうけど・・・。

「って水無さん！うろちょろしないでってば！」

「え～水無さんって言うなら聞いてあげ～ない。」

「ちい！手強い相手だ！あーも！じゃあ聞かないならあっかりーん、て呼ぶよ！」

どっかの主人公なのに影が薄い人みたいな名前だな…。

「それも、いいかも♪」

「だぁにぃ！？」

ろっと喋り方を間違えたようだ。

「と、とにかく後は大丈夫だから！ＡＲＩＡカンパニーまで一度帰ろう？」

明日に来なさいって言われたけど用事は早く済ませた方がいいだろう。

「何も聞こえな～い。」

おのれ！この子は！

「う～！あ～もう分かりました！灯里ちゃん！カンパニーに一緒に帰ろう！」

く！ちゃん付けまでして！恥ずかしい！

「はひ！そうだね♪帰ろうか♪」

「どえ！？」

僕はおもいっきりこけた、単純すぎるぜよ水無さん！

☆☆☆

「で、戻って来たわけなのね♪」

「はい…。」

あの後すぐにＡＲＩＡカンパニーに戻ったのは良かったけど、水無さんが仕事を探しいる事を話してしまった。

「春君～？頼ってねって私言ったわよね？」

アリシアさんは笑顔で言っているが凄く寒気がした。

「いや、でも誰にも頼らないって！」

「ん～？」

怖い！笑顔だけど怖い！

「いや、ですから！」

「何～？」

「えっと…その・・・あの…何でもありません。」

僕は諦める事にした、だって勝てるわけないじゃん！

「ふう・・・いい春君？人は頼ったり頼られたりして絆を作るの、頼らないって事はその人を信じてない事になるの…。」

「え！そんな事ありません！僕はちゃんとアリシアさんや灯里ちゃんアリア社長、そして家族や友達の事も信頼しています！」

「でも、人を頼ったりせず、人の親切を拒むような事をすれば相手は信じてもらえてないって思うの…春君は今それをして相手を傷付けているのよ…。」

「そんな…僕は頼らないと決めてただけなのに…罪を償わないと痛

みを受けないといけないのに…それなのに・・・」

「え？罪と痛み？」

しまった！この事を悟られないようにしないと！

「あ、いえ！でも、分かりました頼る事も大事って事が良く…。」

僕は笑顔で答えた作り笑顔で…。

「分かってくれたなら良かったわ♪」

アリシアさんは嬉しそうに言った一応安心させれたかな？

「でも問題は仕事ですよね…。」

水無さんがそう言った必死に考えてくれてるみたいだ。

「それなら心配ないわ♪」

「え？あてがあるんですか？」

確かに、あてがあるとは限らないし・・・でも心配ないってどうゆう事だろ？

「春君はここで働かせます♪」

へ～僕はここで働くんだ・・・え？

「「え～！？」」

水無さんも驚いて同時に言った、ここで働かせるって！？僕は女性じゃないし、働く事なんて無理だ！

「そうですよ！女性じゃないのに、働く事なんて出来ませんよ！」

また声に出ていたみたいだ、この癖どうにかしないとな…。

「働けるわよ♪春君には事務をしてもらうわ♪」

「事務って受付たりお金の管理をしたりするやつですか？」

それなら男女問わず出来るけど。

「いいえ、受付はあってるけど、それとは別で荷物の運搬と灯里ちゃんと一緒に練習もして頂戴♪」

「でもそれって…舟協会（ゴンドラ）の人に怒られるんじゃ…。」

「あらあら♪大丈夫よ、事務の仕事だから♪」

本当に大丈夫かな…アリシアさんが言うなら問題ないんだろうけど・・・。

「でも、練習はどうしてですか？」

「うふふ♪春君舟漕（ゴンドラ）ぐのが上手でしょ♪だから、灯里ちゃんにアドバイスとかしてあげて教えてくれないかしら？」

そうゆう事か…言わゆる先生みたいなのをしろって事か…。

「・・・はい、分かりました任せて下さい♪」

「わ～い♪ありがとう春夜君♪」

「じゃあ、明日からよろしくね♪春君♪」

「はい♪」

これからは忙しい日々になりそうだな？

## Ｎａｖｉｇａｔｉｏｎ０２その神秘的な花庭（後書き）

はあ～良いですな花といえば自分は彼岸花が好きです？綺麗ですからね？ではまた次回に？

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2232x/

---

ARIA〜水の惑星の奇跡

2011年11月17日05時04分発行